

分子生命科学による維持型社会構築への貢献

静岡県立大学 大学院生活健康科学研究科
研究科長 小林裕和

18世紀後半に端を発する産業革命は、現在の人類の繁栄をもたらしましたが、この間、世界人口は約5倍に増大し、今日に至って、生活習慣病、食糧枯渇、および環境汚染等の問題に直面し、人類が自然の一員であることに立脚した社会再構築の必要性に迫られています。日本においては、老年人口は約20年間で倍増し、この増加傾向は今後20年は継続するものと推定されます。生活習慣病の深刻化は、機能性食品に対して社会の極めて高い関心を喚起し、医療費の若年層への負担を軽減するためにも、健康長寿が指向されます。地球環境の悪化と高齢化社会を克服するために、今世紀には、自然と調和した維持的な社会の成熟が望まれます。



生活健康科学研究科は、人類の生存基盤となる食と環境から健康を統合的に科学する目的で平成3年度に開設され、平成7年度に博士後期課程までを含み体制を整えました。食品栄養科学部を母体とする食品栄養科学専攻、および環境科学研究所を核とする環境物質科学専攻で構成されています。食品栄養科学専攻では、食品と栄養に関する最新の研究を進展しており、その知識と技術を有する優れた人材を育成することを目指しています。また、環境物質科学専攻では、環境創成や、地球環境の保全に役立つ最前線の研究を推進しており、その知識と技術に立脚した有能な人材の育成を目指します。

平成13年度より、両専攻間、本学薬学研究科、静岡大学農学研究科・理工学研究科との単位互換を導入しました。また、平成15年度より、静岡県工業技術センター、静岡県環境衛生科学研究所、聖隷浜松病院腎センター、国立長寿医療センター（愛知県）等との連携大学院を発足し、さらに、インターンシップ制度を単位化しました。本研究科は、本学薬学研究科とともに形成する「先端的健康長寿学術推進拠点」として、平成14年度に文部科学省21世紀COEプログラムに採択されており、教育・研究・社会貢献の一層の発展・充実を図った結果、国内外において高い注目を浴びるにいたりました。社会人入学制度も活用していただき、人類の生存基盤である「食・環境」に興味を抱く諸氏に門戸を開くと同時に、これらの研究を通して、社会に貢献していきたいと考えます。